
三題話「カラス」「運動会」「おはよう」

サヤト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三題話「カラス」「運動会」「おはよう」

【Nコード】

N1451Q

【作者名】

サヤト

【あらすじ】

しゃべるカラスと少年のお話

（前書き）

えー「三題話」とは、3つのお題をすべて文章に使っていくみたいな感じです。

ちなみにお題は、友人が適当に決めてくれました（笑）

僕は今朝とても早く登校した。なぜなら目覚まし時計を間違えて1時間速くセツトしてしまったからだ……。なんと間抜けな理由だろうと自分でも思う。

このような事情で教室には僕しかいないだから孤独に本を読んでいる。

みんなが学校に着き始める時間まで後30分ほどある。

まあ友達がいらない僕には関係のないことだがこの時だけは違った。静かに読書する時間を奪われるのが嫌だった。クラスメイトが来なければいいと思ったりしながら窓際へ行き、読書をしようとしていた。

僕にはもとも友達がいなかったわけではない、むしろ昔はみんなの中心だったかしらいつからだろう小学3年生ごろのころかな僕はカラスとしゃべってしまったところからだろうか？

小学3年生の秋のころ、友達5、6人と下校時に電線に止まっていた1羽のカラスが僕にしゃべりかけてきた。

『ねーねーその君、いっしょにおしゃべりしていこう』

好奇心旺盛だった僕はカラスがしゃべることに少し怯えながらも立ち止まりそのカラスに返事をしてしまう。

「しゃべっているのは君なの？」と質問をしてしまう。するとカラスは『そうだよ』と喋ってくれた。

とそこで友達の1人が僕の異変に気がつき声をかけてくる。

「どうしたの？早く帰ろうよ」

そんな声僕にはほとんど届いていなかったただろうがとりあえず「さきに帰って、カラスとおしゃべりしなきゃいけないから」

僕がそういうとほかの友達たちも異変に気がつき「なにいつてんだ

オメー」のようなことをそれぞれ言ってくる。

しかし僕は「さきに帰ってて」としか言わない。

そんな僕のことを友達は、なんだこいつ？という目で見ながら僕から離れていく。

そんな彼らを見殺しカラスと会話をする。

「どんなお話をするの？」とカラスに問いかけるとカラスは「そうだねー、今日君が学校で起こったこととか教えてくれるかな？」

「うん！えーと今日学校は運動会だったの！それでそれで僕たちの赤組は1位だったの」

しばらくそんな会話が続いた。

するとカラスは「私そろそろ行きやなきゃいけないの」と言う。

「もう行っちゃうの？もつとおしゃべりしようよ」

『周りを見てごらん、もう夕方だよ』

言われて周りを見てみるとオレンジ色の夕焼けが沈んでいくのが見える。

「わかったもう帰るよ、でもまた明日もお話しようね！」

『いいよ、明日もここに居るから』とカラスが言うとバサバサと羽を広げ夕日の方角に飛び去っていく。僕はカラスの姿が見えなくなるまで手を振って見送った。

家に帰り家族に今日あった出来事を話した。当然のことながらそんな話を誰も信じなかった

家族、友人、学校の教師

いろんな人にこの話をした。しかし誰も信じてくれない。

親には病院に無理やり連れて行かれそうになった事すらある。

次の日の下校時、昨日カラスにあった場所へ行くとカラスが待っていた。僕はそこで今日あったことをお話した。

ある日カラス自分のいつも見ているけしきについて話してくれた。空から見える景色はすばらしいと語ってきた。

それを聞いて僕もいつか空を飛び回りたいと思った。

そんな日が続いた。しかしある日突然カラスがいつもの場所にこなかった。

その次の日も、またその次の日も……

まあ、こんな感じで僕には友達がいらない。しかし友達がいなかったら何なのだ？僕はカラスとしゃべるといふ普通の人には経験のないことを体験してしまった。

今、思えばあのカラスは何だったのだろうか？

想像だったのだろうか？

夢だったのだろうか？

幻想だったのだろうか？

空想だったのだろうか？

それがなんであろうと、どうでもいいと思っている。

なぜなら僕はカラスとしゃべっていた時間はとても楽しかった。
今日、見た空からの景色を聞くのが楽しみで仕方なかった。

友達がいなかったことがつらいことではない………と思う。ただ
少し寂しい。

過去のことを思い出しつつ窓際へ行き本を読もうとすると、カラスが一羽こちらをじっと見つめている。

『はやく友達ができるといいね』

そうカラスが言った気がした。

そうしてカラスはどこかへ行ってしまった。

僕はそのとき思った。カラスがいなくなったのは僕がカラスとしゃべっていると僕から友達だった人がどんどん離れていくからだ。
・
・
・
・
・

僕は決心した。がんばって友達を作ろう。

「おはよう」

ニコッと笑い僕は朝一番に来た人に勇気を振り絞って挨拶をした。

（後書き）

えーと二作目です。

見てくださった方ありがとうございました。

感想、アドバイス、レビュー？などお待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1451q/>

三題話「カラス」「運動会」「おはよう」

2011年1月15日21時51分発行